

『資本論』第 2 篇 第 8 章 固定資本と流動資本

第 1 節 形態的区分

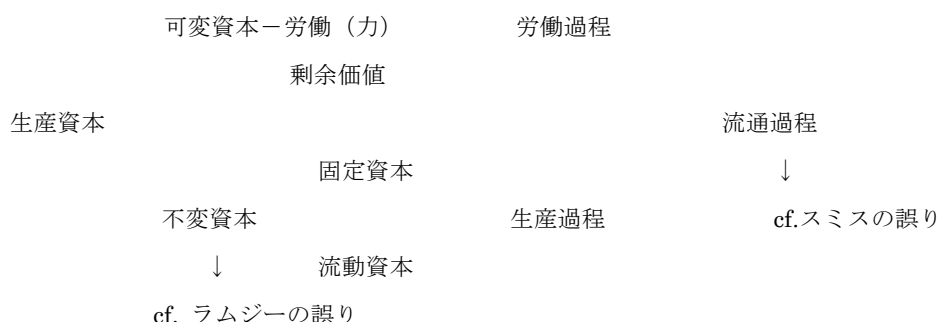
(p.158)

本節の主題に入る前に、まず、不変資本と可変資本の復習¹から始める。すなわち、

- ・ ①不変資本はそれ自身の使用価値とともにそれ自身の交換価値を失うのに比例して、生産物に価値を引き渡す。この引渡し＝価値の移行は、生産手段が生産過程に入り込む時から生産物として形成される時までの期間はその平均計算によって規定される＝生産手段の機能の平均的持続時間によってはかられる。(その間に摩滅し→補填されるまで)
- ②この不変資本は、労働手段として独自の働きをもつ。すなわち、本来生産諸手段としての不変資本は、それが労働過程に入り込むとき、生産物に転化して生産過程から離れて商品として流通部面へ移行する。しかし、(前貸)資本価値の一部分は労働諸手段によって規定されて固定された形態を保持する。労働手段が機能するにつれその価値の一部分は生産物に移るが、他の部分は生産過程に固定されたままである。しかし、その固定された価値はつねに減少し、長かれ短かれいずれは生産物に配分されてしまう。けれども労働手段がまだ労働手段として有効である間は、つねに不変資本の価値は労働手段に固定されたままである→一つには商品在庫として、二つには摩滅し減耗するまで。
- ③もともと資本価値全体は流通のうちにある(＝すべての資本が流通しつつある資本)が、しかしマルクスが考察しようとするのは、i)不変資本がその使用価値で流通するのではなくその価値だけが流通するものであること。ii)不変資本の価値が、商品として流通する生産物に移行するのに応じて、徐々に少しずつ流通すること。iii)不変資本の価値はつねに労働手段が機能する期間を通じて、労働手段に固定されたままであること→そして固定という概念を取り入れて→本題へ進む。
- ・ マルクスは、これまでの不変資本の概念を更に分解して、
不変資本のうち、労働手段に固定された部分を固定資本、生産過程に投じられた(前貸しされた)資本のうちの素材的構成部分を流動資本と定義する。
- ・ ラムジーの混乱← (p.160)
ラムジーは固定資本と不変資本とを混同していると、マルクスは批判する。何故か？ マルクスの形態的区分では、次ページのとおりであるが、ラムジーの固定資本は不変資本のことであると。ラムジーはおそらく、生産を形態変化と場所変化と時間変化の三つの基本的変化のいずれかを意味している。ラムジーは「同量の労働の

¹ 第 3 篇 絶対的剰余価値の生産 第 6 章 不変資本と可変資本

支出された貨物が、消費に適するまでにはきわめて異なる諸期間を要することがありうる」として、その例示に二樽の同種の酒をあげる。数年間穴蔵に貯蔵される樽は価値のうえで増加する。よって酒樽は固定資本をなす、と²。これはマルクスにとっては不変資本と呼ぶべきである。またマルクスの下記定式において固定資本のカテゴリーを補助材料に適用した、とラムジーを批判する。



- 労働手段が固定資本として働く場合と働かない場合
 - ・ 資本価値が労働手段に固定される場合→その労働手段は労働過程における耐久性に依存して価値が引き渡される→その耐久性の差が消滅すると労働手段はその価値を失う。
 - ・ (これに対して) 補助材料、原料、半製品などは (本来の意味での労働手段ではないが) 固定資本の素材的な担い手となる→例：土地改良に用いられる肥料は固定資本として実存し続ける。【何故流動資本と呼ばないか？→論点・疑問点へ】

- 「固定資本・流動資本」と「不変資本・可変資本」のカテゴリーの混同
 - ① 固定資本と流動資本は資本部分の運動形態である。が、それらは労働過程でおこるところのものだけを表現する。
 - ② ところが不変資本と可変資本への分割は上図でみるとおり、労働力の価値と剰余価値とよりなる価値の生産過程によっている。
 - ③ 「固定資本・流動資本」は流通過程に関係し「不変資本・可変資本」が生産過程に関係する、という見解は誤っている (スミスの誤り*添付資料参照)。両者とも生産に関係しており、「可変資本・不変資本」の分割は、労働過程の価値増殖過程への転化という本質のうえに立脚したものである。
 - ④ 労働力の機能が資本に転化する過程こそが、解明されるべきで、この点で「可変資本・不変資本」への分割が出発点となる。この点からみると、固定資本と流動資本との分

² Cf, セリグマン (1925) 『忘れられた経済学者たち』平瀬巳之吉訳 (1955) 未来社

割は、資本制生産の本質を明らかにしてはいない。なぜならそれは、資本部分の回転上の差異にのみ還元され、価値増殖過程や価値移転過程を浮かび上がらせることが困難になってしまう→現象面のみと捉えがちになってしまう。

- ⑤上図での労働力は、それ自身の価値とともに、不払労働の体現である剰余価値をつねに生産物につけ加える。しかしここでは資本価値の回転を問題にしている（剰余価値の回転ではない）から剰余価値を採り上げない、とマルクスは言う。したがって、ここで問題にされるのは、あくまで資本の回転であり、さらに言うならば生産資本のなか（不変資本）でいかなる形態においても、すなわち固定のみならず流動においても必ず資本とその回転に還元しうる、とマルクスは言いたいのであろう。しかしながら問題点は残る。それはいわゆる在庫といわれるものである。か、この疑問は後の論点・疑問点で採り上げよう。

○第1節の要約：固定資本と流動資本の差別

- ① 固定資本と流動資本の差別は生産資本の諸部分の流通形態の差別である。
スミス以来の経済学の混同³→生産資本の流動的部分を流動資本というカテゴリーに入れてしまった→スミスは生産資本 vs 流通資本として捉えているが、マルクスは単に固定資本 vs 流動資本と形態的に捉えるのみであった。
- ② これらの形態は価値が生産物に移転される形の差別を表現する→回転時間の相違
- ③ この差別は、「生産物価値の生産にたいするそれらの構成部分（生産資本の種々の構成部分）の関与上の差別・または価値増殖過程におけるそれらの構成部分の振舞の特徴・から発生するのではない。」⁴そうではなく固定資本は一時に一括して下されるが、しかしその回収は断片的であるのが特徴であり、これがいわゆる恐慌への重要な契機となる。
- ④ 資本の個々の部分の価値が移転される形の差別は、労働過程における種々の労働手段の機能の差別に基づく。すなわち、固定資本のうち移転された価値部分は生産物として流通するが（したがって商品形態から貨幣形態へ移るが、残りの価値はその固定資本が磨耗しつくすまで生産段階に固定したまま残留している。
- ⑤ 固定資本および流動資本は生産資本にのみかんするものであって、決して貨幣資本形態および商品資本形態にかんするものではない。⁵

《論点・疑問点》

1、本節は固定・流動資本の区別を形態的に述べる限りでは、やや技術的にこだわった感がするが、ここだけでそう読み取るのは誤読のそしりを免れないであろう。より重要と

³ 別添付属資料参照。

⁴ ローゼンベルク p.230-231.

⁵ この要約は、ローゼンベルク（1931）『資本論註解』2・1を参考にした。

思われる不変・可変資本の区別をこれまでに十分に論じた上での叙述だからである⁶。しかしなお不変・可変資本特に剰余価値との関連について本節でも詳述して欲しかった。マルクスは本節では剰余価値の回転ではないからとりあげない (p.167)、と断っているのが残念である。

2. いわゆる在庫について

『資本論』には「在庫」という概念はあまり出てこない。本章第 1 節では「商品在庫」(Warenvorrats) (p.159) として一回だけ使われ、それ以外は補助材料・原料・素材・半製品 (p.160) と表現される⁷。それから見れば、マルクスは(完成)商品の場合を在庫と言っているようである。なぜなら、補助材料等が固定資本にも流動資本にも入り込むゆえ在庫とひとまとめに括りたくなかったのではないか、と思われる。これに対して、ブルジョア経済学(近代経済学)では在庫概念はあっさりしていて、原材料・仕掛品・まだ売れていない完成品をさす。この違いから次の疑問ないし論点が生ずる。

【疑問・論点】

- ① マルクスのように補助材料が固定・流動資本それぞれに張り付く状態では、景気循環は在庫循環によってはうまく説明できない。あくまで資本の循環であり、それが固定資本からか或いは流動資本に起因するかが問われることになる。
- ② 近経ではしばしば在庫循環として景気循環の一つの重要なファクターとして分析が定着している。この場合の在庫は国民経済計算上一つの(重要)項目として計上され、また会計上は「流動資産」に計上される。
- ③ 流通過程に入る前の補助材料等は商品か商品ではないのか?例えば仕掛品などは商品か商品ではないのか?それは商品というよりは「財」と呼ぶべきか?しかし近経ではたとえば公共財などというように財もまた商品として扱われており「財」が商品でないとするとは(近経では)無理であるように思われる。

第2節 固定資本の、構成諸部分・補填・修理・蓄積

前節では、投下資本全体が、個々の部分の運動形態から固定資本と流動資本との二つにわかたれる点について詳述した。本節は豊富な事例のなかから、「資本を流動資本にも固定資本にも排列できないが、しかし形成する」⁸資本が存在することを例証する。

独自の種類の一資本の具体的＝記述的考察

- ①固定資本の保存、整頓 ②経常的修繕 ③不可避免的偶然から生まれる修繕などは、固定資本に関連するものではあるが、固定資本にカウントすることはできない。「経常

⁶ 例えば『資本論』第 1 巻第 3 篇絶対的剰余価値の生産第 6 章不変資本と可変資本。付属資料参照。

⁷ ローゼンベルグは「在荷」と訳されている。

⁸ ローゼンベルグ同上。ただし、ローゼンベルグの本節の記述は極めて簡略である。

支出に属するものとして流動資本に算入される」(マルクス)。

○ 固定資本の部分的更新→固定資本の概念の修正

本来の固定資本は一定の期間で償却されていくものであるが、ここに例外的な事例が生ずる。例えば鉄道におけるレールの部分的な更新や、修繕などは流動資本に接近する=ということは固定資本の価値が部分的に流通するということである→前節で強調した固定・流動資本の明確な区別をあいまいにする→マルクスの本節での事例をもって何を意図しているのかが読解できない？

(p.171)マルクス「摩滅は(社会基準上の摩滅を別とすれば)、固定資本がその消耗によって、その使用価値を失う平均度に応じて徐々に生産物に引き渡す価値部分である。」
(下線；服部、以下同様)

(p.172)「…しかし、この固定資本の一定部分、すなわち、その価値が生産物の価値にはいり込んで、生産物とともに貨幣に転換されている部分は、毎年“現物”で補填されるが、他の部分は最初の現物形態で実存し続ける。この資本を固定資本として流動資本から区別するものは、一度に投資されること、および現物形態で少しずつしか再生産されないことである。」

(p.172)「固定資本は生産過程で“現物のまま”作用し続けるとはいえ、その価値の一部分は、平均的摩滅に応じて生産物とともに流通し、貨幣に転換されてしまい、その資本が“現物で”再生産される期限がくるまでのあいだ、資本の補填のための貨幣準備金の要素をなす。

下線部分は流動資本を表していると(服部には)読める。マルクスも、「…拡大された規模での再生産は、蓄積-剰余価値の資本の転化-から生じるのではなく、固定資本の身体から分岐し分離して貨幣形態をとった価値の、新たな-追加的かまたは少なくともいっそう効果的な-同種の固定資本への再転化から生じる。」(p.172)と述べている。

○ 修繕・掃除と固定資本の区別

- ・修繕→流動資本によって支弁される

部分的更新→償却基金から支弁される。

この点では確かに曖昧さが残るが、マルクスにおいては、剰余価値の資本への転化による拡大再生産=蓄積が本質であって、償却による拡大再生産は蓄積ではないことを把握していればよいということであろう。

- ・機械設備の掃除(p.174)

それは機械に含まれている労働の補填ではなく、追加労働である。この労働に投下される資本は、本来(生産物を生み出す)の労働過程にははいり込まないが、流動資本に属する。

この労働に投じられる資本は、流動資本のうちの空費となる→年間の平均計算によっ

て価値性産物に分配されるべき部分に属する⁹。この労働は生産物の価格の計算にははいらない→消費者は無償で受け取り、資本家はただで手に入れる（労働者は自分の身体で支払いをする。機関車のような場合にはその維持労働は経常費として計算に入るが（流動資本として）。→このような例証は原理的な根拠とならないように見えるが？何故なら機関車のような大きな固定資本には当初からこうした維持修繕費は含まれ計算されていると考えられるから。（服部）マルクスは言う。

(p.176)「…必要な修理の範囲は固定資本の生涯のさまざまな時期にさまざまに分配されている。…固定資本はつねに実働労働に維持されるものと想定される。…

以上の相反する記述から、結局修理労働は、固定資本か流動資本か依然として曖昧である（服部）。

- 修理・保守等の支出（ただ働き）は諸商品の価値に入り込まない（p.176）

紡績業において紡車やベルトが切れたからといって、その分高く糸を売るわけにはいかない→平均による価値規定となる。

しかし、固定資本の平均寿命中に分配されているのであれば、これらを補填する追加資本はなぜ流動資本に属するのか？固定資本ではないか、固定資本に分配されていないならそれは流動資本であろう（服部）。ここでマルクスはこれらの修理は、【可変資本】の部分となす（p.176）と述べ、流動・固定資本の形態から突如はずす？「本来の修理に投下されるような資本は、…むしろ流動資本に数えられる、独自の種類の資本を形成する」とやや苦しい説明？

- 保険（p.178）

保険は剰余価値から支弁されなければならないものである（剰余価値からの控除）。とはいえ、自然力などによって発生する異常な破壊の修復を目的とする生産諸手段を備えておくために、より大きな規模での生産が行われなければならない→固定資本を生産する規模増大の必要条件となる。

- 維持費と更新費（p.178）

修理か更新か→原資本から支弁すべきかどうかを巡る果てしない論争があった→資本勘定とすることは収益増（＝配当増）を狙う資本家の常套手段→間違い（p.179）での「カレドニア鉄道委員会」の報告の方が正しい（ようだ）→つまり流動資本とすべきだ（服部→なぜなら固定資本の流動化（固定資本は流通過程には入ってはならない）が起こるから？）

- 鉄道車両の例から（p.179-180）

ラードナー；「（鉄道について）…社会的規模で考察された総生産の内部での、修理と交錯して行われる固定資本の恒常的な部分的再生産の像としては、適当である」→

⁹ 『資本論』第1巻第4篇相対的剰余価値の生産第13章機械設備と大工業における叙述参照（p.448-450）→たとえば「…生産過程での人命に危険なまたは健康に有害な諸事情にたいする人的保護手段の組織的強奪…」。

意味不明（固定資本が流動化することか？）→特に(p.180)における鉄道の修理・維持費の報告例はその詳細なデータにも拘わらず何ゆえ掲載されたのか疑問である（固定資本を流動化してはならないというマルクスの主張のためであろうか？）。

○ 固定資本の償却

(p.182)固定資本には償却基金が必要である→そのため部分的な再生産を排除する。

このため、貨幣流通は、①蓄蔵貨幣として、②流通手段として、③直接準備金として、機能する。①の蓄蔵貨幣は、固定資本を購入したときに始めて流通手段に転化→資本として機能→再び蓄蔵貨幣となる＝つねに変動する←運用をまかされた他の資本家の手で。

【疑問・論点】

- ① かなりのページを費やして固定・流動資本を仕分けしようとするマルクスの叙述の意図はどこにあるのであろうか？割り切ってその結論は次の点に尽きるといえる。すなわち、**固定資本は流通しない**、ということにありそうである。固定資本は完全に摩滅するまでは生産資本形態に張り付いている。その機能は移転もせず（人から人へ）、不動だということであろう。
- ② もし①が正しいとすればマルクスが多彩な事例をもって説明しているのは、一見固定資本に属しがちな修理・更新・維持費などは流動資本に属することとなる。
- ③ 償却をしつつも固定資本の限りない増大は、資本制生産の本質であり、単なる在庫循環などは無視して拡大再生産→恐慌へと導くのが本節の予兆であると読めよう。この点でマルクスは、固定資本の運動とその重要性を発見したといえる。